

## 子どもの居場所を探しています

学校から、子どものスピードで徒歩5分程度の場所で発達障がいや事情により児童センターや自宅で過ごせない子や課題のある子の勉強や放課後過ごせる居場所を探しています。

今年度、たんとキッズあおきが開所して2年半が経過しました。保育園で過ごす未就学の多くのお子さんがキッズあおきの療育を受け小学校に入学していきます。  
今年度、療育を受けたお子さんの中には、支援級に所属せず通常学級のみで過ごす予定のお子さんや、支援級も上手に利用しながら過ごされるお子さんと様々ですが、何も支援が必要なくなったわけではありません。村の中でもし困っている姿を見かけた時は、手を差し伸べてください。私達も支援を必要とされている子どもたちがこの地域ですくすく育ち、大人になっていくための手助けを今後も続けていくために、新しい場所を始め、今後も色々な取り組みを続けていきます。みなさんのお力をお借りすることもあると思います。その時はよろしくお願いします。

### コラム ～愛着障がい と 発達障がい と 赤ちゃん返り～

みなさんは、聞き慣れた言葉とあまり聞き慣れない言葉が出てきたと思います。

「愛着障がい」と「発達障がい」は一見、同じような行動を見せることもあり勘違いされやすい症状の1つです。しかし、この2つは関わり方が違い間違えると状況が思わしくない状況になってしまうことがあり、実際に間違ってしまうしばらく経ってから気づく事もあります。では「愛着障がい」とはなんでしょうか？

言葉から想像するに「愛情」に何か関係していると想像がつくと思います。

「愛着障がい」とは、一言で言ってしまうと“安心感がない状態で育った子”のことを言います。

「愛情不足」で片付けられてしまうことも多いこの愛着障がいですが、必ず全員がなる訳ではありませんし、放置しておくとな大人になった時もしくは思春期の頃に大きな課題となってしまう事が、増えてきています。

そうすると「昔はなくて、最近の話なのか？」と思われる方もいらっしゃると思いますが、そうではなく昔からあった症状の一つではあります。ただ、昔（昭和の時代）は大家族で家庭も兄弟や祖父母で補いながら生活している家が多かったことや、昔とは違い夫婦共働きやシングル家庭も増えており生活のために遅くまで仕事をしなければならない家庭が増えたこと、昨今、核家族化が進みまた兄弟や周辺との関わりも変化してきて、隣近所みな兄弟のような状況ではなくなったこともこの「愛着障がい」が表に現れてくるようになった一つの原因になっていて、むしろ、表に早い段階で出てくるようになり対策が講じられる事はいいのかもしれませんが。そして、この表に出てくる行動が「赤ちゃん帰り」と呼ばれる事もあります。

裏面で「愛着障がい」について簡単ですが触れていきますが、似ているが違う症状として、私達が支援しているお子さんに多い「発達障がい」があります。

実は、両方の症状を抱えているお子さんも少なくないのですが、どちらか一方であっても正しい知識がないと同じような症状に見える事が多く、勘違いされることもありますし、両方を抱えているお子さんも少なくありません。

裏面も読んでいただき、何かお子さんに不安や心配事などがありましたら、村の保健師や教育委員会、たんとキッズあおきまで、ご相談いただければ対応いたします。

# 愛着障がいについて基本的な知識

愛着障がい、言葉だけだと「親の愛情不足」と思われがちです。前ページに書いたように昔は、子どもに愛情を注いでくれる人が周りに沢山いたから起きなかった。と思うかもしれませんが、実はそうではありません。

昔からこの症状も発達障がいと同じように現れている子もいたのですが、今のように診断される事も少なく、診断される以前の問題で診察すら受けなかった方がほとんどです。

また、家庭に寄っては大家族だったりすると、そのような課題を抱えていても表面化することが少なく、本人も気づかないこともありました。

言ってしまうと、昔からある障がいではありますが、比較的世の中で認知されるようになってからは新しい障がいの一つです。そのため、大人になってから改めて診断される方も少なくありません。

愛着障がいの要因となっているのは愛着形成というものが、幼い頃の経験が大きく影響しています。

図は「愛着の輪」と呼ばれているもので、これは幼児

の頃に多く見られる行動で、親（安全基地）から離れ遊び、不安になったら戻り気持ちを充電して再び遊びに出かける事を繰り返します。この行動から、次第に離れていても親（安全基地）の存在を感じるようになり、戻る時間が長くなっていきます。

安全の輪は必ず母親でなければならないということではありませんが、「安全基地」がうまく機能しない場合、不安を抱えたまま成長をしていく事になり、ストレスを感じる経験や不安や壁をどうやって乗り越えていくのか、社会的な行動の確認などがやりにくくなり、次第に褒められても嬉しく感じなくなってしまうたり、過剰な感情行動や不安な行動が現れてきます。結果的に「愛着の未形成」となりこの状態が慢性化してくると「愛着障がい」と診断されることとなります。



## 愛着障がいはどんな行動をするの？

### ★2つの愛着障がいに見られる共通の行動

- ・体調不良を起こしやすい（風邪を引きやすい）
- ・身体が周りより小さめである
- ・自傷行為（髪の毛を抜く、爪を酷くかむなど）がある
- ・他害行為（他人をたたく、噛むなど）がある
- ・不眠傾向や食欲不振がある
- ・大人を試すような行動に出る
- ・理由もなく嘘をつく

## 愛着障がいの2つのタイプ

### 「反応性愛着障がい」

このタイプは、人に対して過度な警戒をしまい、人を頼ることが苦手で、表情がなく笑顔などが見られません。他の子との交流がほとんどありません。

**この特徴は、自閉スペクトラム症の行動と似ています。**

### 「脱抑制型対人交流愛着障がい」

こちらは、過度に慣れ慣れしい態度を取ります。初対面の人に対しても抱っこやおんぶをせがんだり、馴れ馴れしく場にそぐわない言動をしたりします。

**この特徴は、ADHDの行動と似ています。**

## 愛着障がいの治療はできる？

あくまでも愛着障がいは心の病気になりますので、完全に治療で治るというものではありません。

また、子どもと大人になってからの治療方法は異なります。今回は子どもの治療について説明していきます。

### 愛着障がいになりやすい環境

- ・親や養育者が本人に関わる時間が、必要最低限になりがちでコミュニケーションやスキンシップが極端に少ない
- ・年齢の近い兄弟がおり、親が家事や仕事もしくは、何らかの状況により時間に追われ子ども達に関わる時間が極端に少ない

などの状況、いわゆる「子ども（本人）と関わる時間が少なく、少ない時間でもコミュニケーションやスキンシップが極度に少ない」場合、愛着障がいになりやすいと言われていています。

多くの子どもは、5歳までにこの状況を発症し以後の生活に大きく影響されます。

治療法は、薬を飲んだり静養したりということではなく、親子の関わりを再認識してもらったり、場合によってはしっかり関わる時間を改めて作るということが必要になります。

**この内容が気になっているお子さんに「赤ちゃん帰り」と呼ばれる行動が出た時は最大のチャンスです!!**

# たんとキッズあおき（NPO法人たんと。）

## TEL 0268-75-6789

青木村田沢3075-1

■開所時間 9:00-17:00

■定休日 土日祝日

NPO法人たんと

